

イネ縞葉枯病に対する薬剤による効果的な防除体系

農業総合センター農業研究所

イネ縞葉枯病(図1)はヒメトビウンカ(図2)が媒介するウイルス病です。イネ縞葉枯病は発病してから治療する方法はなく、被害を減らすためには、イネがウイルスに感染しないようヒメトビウンカを防除することが重要です。

このため、イネ縞葉枯病の多発地域においては、殺虫剤の播種～田植時育苗箱施用と6月中下旬の本田散布を組み合わせた体系防除が有効です。



図1 イネ縞葉枯病の症状(穂の出すくみ)



図2 ウイルスを媒介するヒメトビウンカ

ここがポイント

体系防除により効果的に被害軽減

殺虫剤の播種～田植時育苗箱施用と本田散布を組み合わせた体系防除は、イネ縞葉枯病多発地域でも高い防除効果が得られます。また、殺虫剤の育苗箱施用を行った場合、本田散布時期が適期(例年は6月中～下旬)から1週間程度遅れても防除効果が低下しにくいことが明らかになりました(図3)。

本田散布は、天候等により適期に散布できない可能性があります。体系防除を行うことで、適期から遅れても安定した防除効果が得られます。

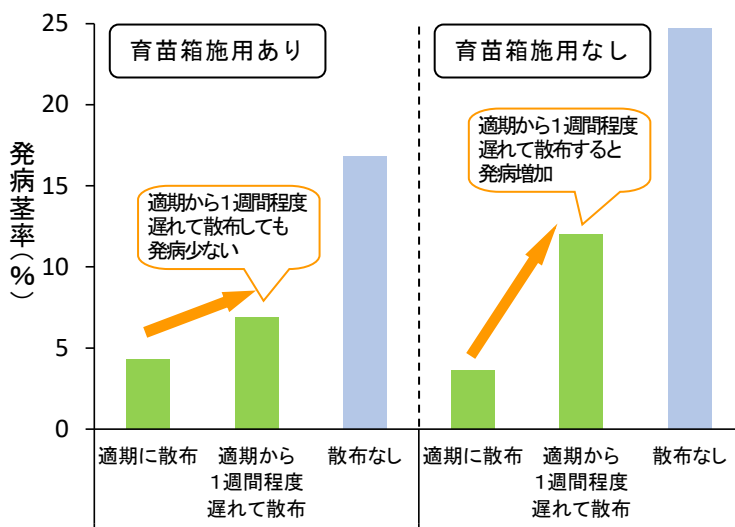


図3 イネ縞葉枯病防除における育苗箱施用の有無と本田散布との関係

注) 育苗箱施用剤はイミダクロプリド粒剤、本田散布剤はシラフルオフェン乳剤を使用した

体系防除で収益UP!

体系防除は、育苗箱施用や本田散布のみの場合と比較して防除経費は増加しますが、減収軽減効果が高いことから収益は増加します(表1)。

活用上の留意点

- イネ縞葉枯病の薬剤防除については、お近くの農業改良普及センターにお問い合わせください。
- 本田散布の適期は、病害虫防除所が発表する病害虫発生予察情報等を参考にしてください。
- 試験に使用した農薬は、平成30年4月11日現在、稲に登録のある薬剤です。

表1 体系防除による収益の試算

育苗箱施用	本田散布	粗収益 (円/10a)	農薬費等 (円/10a)	粗収益-農薬費等 (円/10a)
施用あり	適期に散布	116,534	3,862	112,672
	適期から1週間程度遅れて散布	116,306	3,862	112,444
	散布なし	95,097	1,962	93,135
施用なし	適期に散布	113,113	1,900	111,213
	適期から1週間程度遅れて散布	108,324	1,900	106,424
	散布なし	80,046	0	80,046